

はじめに

私のネットワーク
ワーキング哲学

何かをきっかけに、社会に対して行動を起こさずにはいられないことが、私たちにはあります。やむにやまれぬ気持ちから起こしたその行動は、すぐに成果を挙げるとは限りません。むしろ周囲の理解を得られず、明らかな成果に結びつかないまま諦めてしまうことの方が多いくらいでしょう。

しかし中には数々の困難を乗り越え、時間はかかっても賛同者を増やし、やがては社会の常識を変えてしまう例があることも事実です。時に無力感にとらわれてしまいがちな私たちが、市民としての仕事を成し遂げるためにはどうすれば良いのでしょうか。この「市民の仕事術」シリーズは、その問いに対する私なりの答えです。

振り返れば私もまた、さまざまなきっかけから、数多くの市民活動やNPOにかかわってきました。その中で人との出会いや結びつきへの持つ意味、つまり「ネットワーキング」と、集団を組むときの方法論、つまり「マネジメント」に自覚的であったことが、関わってきたいくつかのプロジェクトの目標達成や、社会変革の実現につながったと考えています。

本書『市民のネットワーク』 市民の仕事術Ⅰ』ではネットワークを、『市民の

マネジメント 市民の仕事術Ⅱ』では、マネジメントを中心テーマに取り上げます。

以下、ここでは私のネットワーキング哲学を語りたいと思います。あつ、哲学って偉そうですけど、生きる態度の選び方のことです。

私は自分の二十代を、世の中を知るための修行期間だと決めていました。青二才の私がまっとうに世の中について発言したり、困っていたことを何とかしたりするためには、自分に欠けているものは何か。その修行させてもらうのが二十代。20歳ぐらいでは、世の中のことがわからないのが当然です。だからどうやってお金が動き、人が生きているのかを勉強させていただくつもりで出会った仕事をしていました。私にとってその期間に学んだことは、とても大きいものでした。

でも二十代の僕は、無茶ばかりしていました。仕事は忙しく、夜は接待もあつて暴飲暴食。いつも体調が悪くて、このままではダメだと思っていました。そのうちに勤めていた宝石貴金属卸の会社が倒産してしまい、仕入れ先とお客さんとを引き継ぐ形で会社を興したのが26歳。資本金は500万円でした。

子どもが生まれることもあって、夫婦で玄米菜食を始めたのが、1981年の1月2日。31歳の時です。肉も魚も砂糖もとらずに3ヶ月も過ごすと、みるみる体が変わるのが自分でわかりました。起きる時間が日に日に早くなっていって、はつきりと体が軽くなる。農業や食べ物に興味が増えました。

一方、子どもの頃から本が好きで、編集や出版に興味がありました。ただ本を読むのが好きだけでなく、本を作ること、売ることに興味があったんです。そこでこの81年に、100万円ぐらいの貯金を元に、一年に一冊のペースで出版を始めることにしました。4月に子どもが産まれると同時に、「カタツムリ社」という出版社を設立。最初の本である『戦争と私』は、新聞などで紹介されて話題になりました。

ラジオで話すのを聞いて「面白いな」と思っていた東北放送のアナウンサーの岡崎トミ子さんに、『戦争と私』を送りました。今は国会議員の、あの岡崎さんです。興味を持ってきて訪ねて来られたのですが、戦争体験の本を作ったことから私のことをお年寄りだと思ひ込んでいたらしく、若いのでひどく驚かれました。彼女が「反原発仙台の会」のメンバーだったことから、もともと原発に疑問を持っていた私も、その会に顔を出

すようになります。

またこの年の秋、朝日新聞の県内版に、「食費は1ヶ月わずか1万円」という見出しとともに、わが家の玄米菜食生活が紹介されました。興味を持った人たちから次々と電話がかかってきて、1ヶ月でおよそ100人から問い合わせがありました。直接自宅を訪れて来る人までいて、これが「みやぎ自然食生活研究会」を始めるきっかけになります。このように、戦争、食と農、反原発という3つの要素が重なり合いながら、私の市民活動が始まりました。

市民活動を始めた頃から、個人紙であるミニコミ、今で言うリトルプレスをたくさん作って、名刺代わりに配っていました。今でこそブログやツイッターがありますが、当時は紙の時代です。個人でメディアを持って発信していた人は珍しかったですね。B4判コピーが1枚40円もした頃です。あまりにお金がかかるので、コピー機と製版機と輪転機を買って、自宅を印刷所にしてしまいました。中古でも40〜50万円くらいしたかな。けれど、ミニコミを出しつづけることで、人脈や人間関係が広がって行きました。まさに、重

要なネットワークワーキングツールです。

ネットワークワーキングは、自分からオープンにならないとつながっていきません。自分のことを隠している人のところには、誰も寄ってきません。その意味で、僕は食べているもの、子育ての仕方、読んでいる本などをミニコミにしてどんどんオープンにすることで、多くの人と深くつながり合うことができた。これも、おそらくはネットワークワーキングの極意です。

時代は変わりましたが、本質は変わりません。本気でブログを読んでもらいたければ、単にアドレスを知らせるだけじゃなくて、ブログで何を書いているかをアピールできるツールを作って配ると良い。要は読んで欲しいと本気で思っているかどうかの違いです。チラシ1枚配るにしても、どういう人に届けたいのか、本気で考えなくちゃいけない。砂山に上から水を流すと溝が出来るから、二度目以降も水は同じところにし流れない。その話を聞いてほしい相手は誰かを本気で考えて、その人に届くように工夫しなければ、告知はうまくいかない。そこではじめて、工夫が発生するんです。

1984年にカタツムリ社から出した『ぬりええほん ひやくぼんめのサル』は大ヒットになりました。「核兵器はいらない」という自分の思いをしつかりと持ち、地道に伝え、広めることこそが、きっといつか核兵器のない世界を作り出すという内容です。

餌付けされたサルの中の1匹が、イモを洗って食べたところ、まねをするサルが現れたという事実。そこから人類の文化の伝播について思いを馳せた科学解説者のライアル・ワトソンは、これを『生命潮流』という本の中で神話的に紹介しました。新しい文化や思想は、最初は日常的に接触のある少数者の間で広まるに過ぎないが、ある数を超えると急速に、爆発的に広まって新しい時代の主流となる、という考え方です。

これをさらに援用して、ケン・キース・ジュニアという人は、この時期、ヨーロッパにおける核戦争の危機が目前に迫り、無力感にとらわれていたアメリカ人向けに『核戦争から地球を救う百番目のサルとは?』という本を書きました。これが当時の米国で、100万部以上のベストセラーになります。

その日本語版を読んで感動した大阪の主婦きたむらゆみさんは、一晩で絵本を仕上げ、コピーを綴じて作った50部を知人に配布しました。それが、以前からお付き合いのあった

僕のところにも届くと、僕はすぐに「これはコピー代もバカにならない。コピーより安く出版しましょう」という手紙を書いたのです。こうして発行された『ぬりええほん ひやくばんめのサル』は、2年間で3万冊も売れ、カタツムリ社の名前は日本中に知れ渡りました。

当時は毎日自宅の電話が鳴りっぱなしで、トイレにも行けないほどでした。周囲に配るためにまとめて買ってくださる方が多く、一日に800冊を発送したこともあります。仕事から帰ると夜から明け方まで荷造りという毎日、僕の人生の中でも大きな出来事になりました。

「百番目のサル現象」自体は、科学的な話ではありません。核時代の一種の神話です。しかし『ぬりええほん ひやくばんめのサル』は、人の思いが本というツールになり、本が人と人をネットワークキングした好例だったと言えることができるでしょう。

核戦争の危機におびえながら、自分一人では何もできないという無力感に対して、そうではない、というメッセージが、『ぬりええほん ひやくばんめのサル』にはあったのです。たった一人でも真剣に考える人が増え、小さなことでも行動に移すことに希望があ

る。六〇億分の一は、ゼロではなく、世界を変えることができる。こうしたメッセージの新鮮さは、今でも変わりません。たとえば今、原発に対して自分にもできることがある、できることを自分で発見する力が大事だと思うことこそがそうです。

1985年、仙台市の立町で、エコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」を始めました。カフェであり、本屋であり、自然食品店であり、フェアトレードショップであり、フリースペースでもありました。最初は共同経営でしたが、89年からは私の経営になります。

「ぐりん・ぴいす」の特徴の一つは、「広場」を意識して経営していたことです。日本では、公園で集会をやるのにも警察の許可が必要です。公園はそもそも自由な場所なはずなのですが、日本の公園はイギリスのような公共空間ではなく、行政の持ち物に過ぎません。また、目的のあるグループには、限られた特定の人しか集まりません。たとえば「反原発仙台の会」には、原発に賛成の人はまず来ません。しかし「広場」は無目的な集まりの場です。街の中に誰もが集える「広場」を作り、そこで環境や食べ物や原発のことを含む話や情報交換が、自由にできるようにしたかったのです。

また当時は、仙台市内にはチラシを置く場所が本当にありませんでした。反原発の集会

チラシ等は、まず公共施設では扱ってくれません。流通の自由がないということは、表現の自由がないのと同じです。実際に自分でチラシを撒いてみて、チラシを置く場所のない社会は恐ろしいと思いました。

そこで、「ぐりん・ぴいす」にはチラシを自由に置けるスペースを作り、自分とは反対の意見のチラシやポスターであっても、とりあえずなんでも受け付けました。すると、いろいろなチラシ、ポスター、ミニコミが集まるお店になり、いろんな人が集まるようになったのです。「私設公民館」と、僕は呼んでいました。「ぐりん・ぴいす」には、普通のサラリーマンもOLもランチを食べにきていたけど、そういう人だって原発に疑問を持っていたり、農薬は嫌だと思っているかもしれないんですから。

以前からアメリカやフランスから僕に会いに来る人たちがいて、アメリカの西海岸では、みんなでお金を出し合ってガイドブックを作っているという話を聞いていました。そこで1987年、仙台を中心とする自然食のお店や福祉関係の団体などの情報を集めた『センドードマップ』を出しました。